

ホテルのニュースレタ

日本ホテルの会 2002/10 第23号

こんごう せきりんざん

知られざる金剛石林山

日本ホテルの会理事 川村善治

日本の九州から南は、南西諸島の島々が台湾まで点々と連なっている。屋久島を始め、トカラ列島の宝島、奄美諸島、沖縄諸島、先島諸島の与那国まで、亜熱帯の島が数多くある。まさに熱帯の玄関口である。これらの島々には、希少動植物が数多く生息しており、東洋のガラパゴスと言った方がよいのか、東洋の宝石箱と言った人がいるが、私は後者の方があたっている様な気がしていると思う。

私は奄美大島諸島に30年来研究の仕事で通った事があり、又、沖縄南部に12年間仕事で住んだ事がある。両島もハブと台風がなければ、よい島である。最近ハブ咬症も両島とも約三分の一に減少した。本土と違い空気がとてもおいしい。植物の葉の緑は濃く艶がある。海はエメラルドグリーンで美しく、特に奄美の瀬戸内海峡のサンゴはすばらしく、快晴で太陽が差し込むと、色とりどりのサンゴが一段と美しく、又色とりどりの熱帯魚の踊っている姿はまるで竜宮城とはこんな所なのかと思われる。

さて、陸上にもすばらしい神秘的な秘境がある。それは、沖縄本島の山原北端の近くにある。金剛石林山である。そこは、地元の人以外にはあまり知られていないが、国定公園に指定されている。今年3月に南都北

部楽園が一般に初めて公開された。私も今回初めて金剛石林山を見学することが出来たので御紹介しよう。

7月1日沖縄は梅雨が明けたが、むし暑い。車を借りて午前中に那覇を出発、現地に1時ころ到着した。那覇から名護までは高速道路があり、名護からは国道58号線を北に東シナ海を左に見ながら、カーブの多い海岸線を走る。午後から快晴になり、海は一段とエメラルドブルーで実に美しかった。北端の辺戸岬レストハウスに着いた。丁度見学に招待されていた地元のホテルや旅館のオーナーの一行十数人と一緒に同行することができた。案内は南都北部楽園の喜瀬社長である。レストハウスの前よりバスに乗り5～6分キビ畑の中を走り山道に入る



槍の様な金剛石林山

遠くに烏帽子岩がみえる

と、金剛石林山の入口に到着。ここで各自に杖を渡される。雑木の凸凹の道を登り、中央広場のスタート点につく。順路は、奇岩石エリアを通ると細い道にはロープがはってあり、迷うことはなく、普通の靴で登れる。やがて右側に灰白色の石林山が目に入る。金剛石林山は2億年前の石灰石が雨水で長い年月をかけて侵食されたもので、世界最北端の熱帯カルストと言う地形です。カルスト台地に石灰石が塔の様に露出している状態を『ピナクル』と言い、大きいものは10mもある。この石林山には一景から八景まであって、それぞれ名前がつけられている。石林山の細い石段の道を登っていくと周囲の様子が一段と険しくなり、ネパールのポカラから見たヒマラヤ山脈を縦に切り割った様な荒々しく切り立った巨岩石が白色又は灰白色に林立する景観は、宇宙に行った様な神秘的なファンタジーを感じる。目から心まで引きよせられる。

やっと頂上五景に着く。大パノラマだ。汗をふき一息つく。気温30℃以上快晴である。目の前に辺戸岬と奄美諸島の与論島が一望に目に入り空と海が実に美しい。話は別であるが、途中数ヶ所の石林に赤いペンキで塗られているのが目についた。これはユタ(霊的能力者はシャーマンの様な存在)のウ



木の精霊が住むという巨大ガジュマル

ガンジュ(拝所)の場所である。頂上にも一ヶ所あった。ここからは下り坂になり、少し歩くと、右側に変変わった形の岩がある。烏帽子そっくりの10m以上の岩や檜の様な奇岩の林は、ほかには見られない珍しい岩である。ふとみると目の前の木に緑の竹の葉の様なものがすごい速さで上に走りあがった。よく見るとキノボリトカゲだ。全長25cmはある様だ。木の上から警戒しながら、我々をみている。

やっと中央広場につく。森林浴エリアを通り七景に入る。大ソテツが石林山の中に密集している。これはワシントン条約で保護されている。ここには約6万本以上みられ自主林は大変貴重なものである。昔この場所は畑としてソテツを食料にしていた。次は八景で足が止まった。沖縄県最大の巨大ガジュマルの木だ。この様に大きな木は私も初めてである。しっかりと大地をおさえつかむ様な形はみごとだ。巨大ガジュマルには『ブナガヤー(木の精霊)』が住んでいるといわれている。木の幹や枝、根全体が灰白色でまるで今にも動き出しそうな美しさである。この様な木が他にも数本ある。約1時間40分かかった。面積は東京ドームの11倍もある。



白色の金剛石林山

次にこの金剛石林山の動植物を紹介しましょう。ここに自生するソテツ、ガジュマル、シークァーサー（果実）、ゲツキツ、その他20種類以上も群生している。高さは10m前後が多い。昆虫はトンボ類、チョウの種類はかなり多い様だ。ホタルはオキナワマドボタルが4～5月ごろ大変多い様である。爬虫類は、リュウキュウアオヘビ、キノボリトカゲは大変多い。又、クロイワトカゲモドキも生息している。リュウキュウハブは餌

となるネズミが少ない為に、ほとんど見ないという。又リュウキュウイノシシは餌となるミミズ、木の実が多い為よくみかけるという。

以上の様にこの宝の様な場所を小、中、高学生の教育の一環として見学することをすすめます。それと共に沖縄に観光又は仕事で来た時はぜひこの秘境を見学してください。

大阪府池田市のホタル保全活動と「ヒメボタルサミット」

池田・人と自然の会 松本 馨

1. はじめに

私たちが活動をしている池田市は、大阪（梅田）から阪急電車の急行で20分ほどの所にある比較的落ち着いた住宅街が広がる町です。昨年6月には附属池田小の痛ましい事件がありましたが、北に五月山があり、南に猪名川が流れ、古くからの歴史と文化の香りが漂う緑豊かな環境です。この住宅街にゲンジボタル・ヘイケボタルそして陸生のヒメ（大型）という3種のホタルが暮らしています。

2. 発足の経緯と池田市のホタル状況

私が大阪市内から越してきた10年ほど前、偶然用水路のほとりでホタルを見つけました。調べてみるとヘイケボタルでした。用水路に沿ってかなりの範囲に生息し、別の水路にはゲンジボタルも発生していることがわかりました。季節になると住宅の裏手や道路端などで光っているのですが、ほとんどの人がその存在に気づいていませんでした。そのうち、用水路にコンクリートの蓋がされ、次々と生息地が消えて行きました。何とかしたいと思っていた頃、地元の小

学校の先生と知り合い、その小学校でホタル観察会を開くことになりました。200人以上の親子が夜、住宅の間をゾロゾロ歩き、家の横の狭い水路や、歩道の下の暗渠を格子越しに覗き込むという、一般的なイメージとはかなり違ったホタル観察会です。（一人で観察していたらまるで不信人物です。）多くの参加者から、「遠くにホタルを見に行かなくてもこんなところにいたんや！」という少し驚きの混じった声や「こんな所でけなげに光ってるなあ。」といったホタルに同情する声が聞かれました。この観察会に参加した保護者の中に自宅でホタルを育てていた人（現事務局長の今城さん）がおり、また、インターネットのHPを通じて、市内の別の小学校に地域の昆虫に詳しくヒメボタルの保護を訴えていた先生がいることがわかりました。これらのメンバーが集まって、「池田・石橋のホタルを守る会」を結成し、市内のホタルの現状の調査と観察会等の活動を組織的に始めたのが1998年のことです。その後、ヒメボタルを中心に新たな生息地が次々と確認され、小さな発生場所も数えれば約30ヶ所ほどのヒメボタル生息地があ

ることがわかりました。今城さんによると、市内の70%以上の住民が、歩いて500m圏内にホタルの生息地があることになるそうです。

3. ヒメボタルサミットについて

「池田・石橋のホタルを守る会」として活動を始めた頃、「第2回ヒメボタルサミット」が隣の兵庫県川西市で開催され、私たちも池田のホタル生息状況を初めて発表しました。この「ヒメボタルサミット」は、「兵庫県立人と自然の博物館」の研究員である八木氏や川西市・豊中市・高槻市などのヒメボタルに関わる自然保護グループのメンバーが中心となって、1996年に始められたイベントです。当時その生態や分布などがよくわかっていなかったヒメボタルを市民の手で調べ、その結果や活動内容を交流し合うのがその目的でした。その後、毎年各地の団体が順番に主催し運営されてきました。第5回は本会が担当し、池田市で開催されました。大阪府・兵庫県・京都府から約20団体(グループ)が集まり、各地の研究者や行政担当者も含め150名ほどの参加がありました。昨年度、第6回が吹田市で、大場先生を招いて開かれた時には、関東からも参加があり、年々その範囲は広がってきています。また、毎回新しい知見が報告され、ヒメボタルについての認識が回を重ねるごとに深まってきている実感があります。

4. 会の活動について

本会は「池田・石橋のホタルを守る会」として、発足しましたが、池田市内には、ホタル以外にも貴重な生き物たちが色々生息しています。サワガニやモクズガニが市内各

地で見つかりますし、淡水魚は30種類近く、トンボは50種類以上確認されています。オオムラサキや季節にはアサギマダラの渡りも見られます。ホタルはその中の看板役者ではありますが、ホタルだけの保全活動にするつもりはありませんでした。集まったメンバーも植物・魚・鳥や哺乳類など様々なフィールドで活動してきており、1999年3月「池田・人と自然の会」という名称で、再スタートをし、会員数200名ほどの団体として活動を続けています。現在取り組んでいる主な活動は、①市内の生き物調査(1999～2001年度は池田市からの受託事業として実施)・保全活動、②年間15回ほど自然観察会の運営、③棚田の保全活動(地元小学校に稲作体験を提供)、④年6回の会報(B5版16ページ程度)発行、⑤市内のイベントや施設で「池田の自然展」を開催、⑥市役所や市内の小学校に地元の魚が泳ぐ水槽展示、等々です。もちろん、ホタルの調査・保全活動は①の中心的活動です。小冊子『池田市に生息する人里のホタル』の発刊も行いました。現在、本会主催の観察会(年4回)のほか、本会のスタッフが協力して市内4つの小学校と1つの高校でホタル観察会が行われ、今では多くの市民にホタルの存在を知ってもらうようになりました。しかし、ヒメボタルの生息地は民有地が多く、駐車場や宅地になるなど少しずつ確実に減っています。また、近年までゲンジやヘイケが見られた水路にもう一度ホタルの光を復活させたいとも思っています。保護・育成のための様々な方策や技術を各地で同様の取り組みをされている方々と連携しながら積み重ねて行きたいと考えています。

寄贈図書

次の出版物を寄贈して頂きました。この場をお借りしてお礼申し上げます。
「阿久比のホタル 平成13年度調査報告」阿久比町ホタル研究会
「2001年版 キリンピール環境報告書」キリンピール株式会社

北九州市ほたる館 開館

北九州市建設局下水道河川部水環境課ほたる係 上田直子

市民を中心に20年以上の間、ホタルの保護育成活動を続けてきた北九州市では、百万都市でありながら、今では市街地の近くでもホタルを見ることができます。

今回紹介する「北九州市ほたる館」は、‘北九州ほたるの会’などホタル復活を願う本市の市民活動の発祥の地である小熊野川のすぐ側に、廃止になった保育所をリフォームして、水辺環境の保全活動を支援するとともに、ホタルをはじめとする水生生物やその生息環境について学び、研究できる施設として、平成14年4月にオープンしたものです。

ほたる館の中心となる研究室には、水辺の横断面を表現した幅4mの生態水槽があり、様々な水生生物とともに、ゲンジボタルやヘイケボタルの一生を、自然に近い状態で観察することができます。また、学習室や研修室には、日本や世界のホタルの仲間、ホタルの生息環境などを紹介するパネルや精密模型をはじめ、ホタルの発光を忠実に再現したホタルロボットなどを展示しています。このほか屋外には、小川を再現したせせらぎ水路や、



マイボタル制度に参加する家族

最近減少しつつあるヘイケボタルの飼育実験を行う水田型ビオトープがあります。

このような種々の展示に加えて、この施設は、これまでの市民活動のノウハウを蓄積、伝達さらに未来へ発展させる拠点として、また、総合的な学習など学校教育の場として幅広く活用されることを目指しています。

ほたる館では、現在、多くの市民に館を知ってもらい、施設を利用してもらうために幾つかの事業を実施しています。その一つがマイボタル制度です。この制度は、自分でホタルを育ててみたいと希望する人が、ほたる館の施設を利用して、専門家の指導を受けながらホタルを飼育する制度です。毎年、5月頃に50団体程度を募集します。参加者は、地元の川でホタルを捕まえ、飼育ケースの中で産卵させた後、ほたる館で幼虫の世話や成長の過程を観察し、秋頃に幼虫を地元の川に放流するものです。一人一人の手でホタルを育てることで、生命の大切さや水辺環境の大切さを体験学習できると考えています。



ほたる館の外観

また、市民参加で、ゲンジボタルだけでなく、ヘイケボタルやヒメボタルの分布調査を行い、生息環境やその保全・復元の方法について考える「ほたる塾」も、8月から開講しました。参加者には、川だけでなく、水路から林、森へと自然環境のつながりの重要性を知ってもらい、地域に戻ったとき新たな活動の輪を広めてくれることを期待しています。平成13年6月から始まった韓国ホタル研究会との交流も、両国に共通し

て生息するヘイケボタルを通して、今後ますます活発になっていくと思います。

開館から約5ヶ月を経過して、ほたる館の入館者は早くも1万人を超えようとしています。かつて、本市のホタル保護育成活動の出発となったホタルの光のように、「ほたる」の名を戴いた当館が、今後の水辺保全活動のさらなる発展へ力を与えるものとなればと心から願っています。

第11回 「ホタルを通じて身近な自然を考える」シンポジウム

平成14年11月9日(土)午後1時から、上野動物園内動物園ホールにて第11回「ホタルを通じて身近な自然を考える」シンポジウム～里山に心なごむ自然環境を取り戻そう～が開催されます(日本ホタルの会・東京都恩賜上野動物園共催)。

今回は「ゲンジボタルとヘイケボタルの交雑と考えられるホタルについて」手代木渉(日本ホタルの会)、「生田緑地のゲンジボタル」亀岡千佳子(川崎市青少年科学館)、「Think globally, Act locallyーキャンパスの水路で地球環境を考えるー」井上務(創価大学螢桜保存会)、「ホタルの環境に住む生きものたち」藤本和典(アースシェアリング)、「玉川上水のゲンジボタル」野崎清代(東京都立日野台高等学校)の5講演を予定しています。

後日、案内のハガキをお送り致しますので、シンポジウム当日はそのハガキを動物園入り口にてご提示下さいますようお願い申し上げます。

談話会

9月21日(土)に昭和女子大学において第3回談話会が開催されました。演題は、東京都立大学の鈴木浩文さんによる「ホタルの遺伝子をみることの意味」で、ゲンジボタルとヘイケボタルでは日本列島への分布拡散の経緯が異なることや、南西諸島におけるキイロスジボタルとオキナワスジボタルの分布と各島間の系統地理学的な関係が紹介されました。

ホタルのニュースレター 第23号 平成14年10月31日発行

編集 日本ホタルの会事務局

発行 矢島 稔

156-0041 東京都世田谷区大原2-17-6

ステーションプラザ代田橋410

(株)オーグラム内 日本ホタルの会事務局

TEL & FAX: 03-3328-7379

e-mail: KYW07337@nifty.ne.jp



日本ホタルの会

JAPAN FIREFLIES SOCIETY

印刷 システム印刷株式会社

191-0031 東京都日野市高幡4-5-4

TEL: 042-591-1411 FAX: 042-591-7701